

◆堺市のシヨッピンゲセンターの一角で11月13～15日、「さかい介護スマイルデイ」が開かれた。家庭で介護をする人に息抜きをしてもらおうと市が開いた催しで、介護体験談やお笑いライブのほか、セラピストが話を聞くコーナー、マッサージコーナーも設けた。

◆介護保険制度では高齢者らを短期で預かるシヨートステイサービスがあるが、近所の目を気にしたりして一人で抱え込む介護者も多

時流 地流

い。堺市は英語で「一時的休息」を意味する「レスパイト」をキーワードに家族介護者が燃え尽きない支援に動いている。自治体ではまだ珍しい取り組みだ。ボランティアを募り看護師や編集者ら約20人でチームを作り今回の催しも支えた。

◆厚生労働省は団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となる2025年をめどに地域ごとに介護や医療を在宅で提供する「地域包括ケアシステム」の構築を目指している。家庭介護が増える

孤立する介護者に休息を

なか、隣近所による支えが今後は一層重要になる。

◆会場で一般社団法人日本エルダーライフ協会（京都府木津川市）代表理事の柴本美佐代さんに出会った。

昨年8月に協会を設立し、介護者を支援する「お節介士」という名称を考えて育成講座を開いている。心得10カ条の第1は「お節介は、節度ある介入と心得よ」。

介護者の話に耳を傾け、必要な情報を提供する。

◆介護保険や高齢者住宅、介護資金の講座をこれまで約200人が受講し、43人が認定を受けた。「制度や民間サービスを上手に使う情報を提供できる人が地域や職場に増えたら、周囲の意識も変わり孤立する介護者が減ります」と柴本さん。11月には大津市の集落の福祉委員24人がそろって講座を修了したという。

◆堺市ではNPO法人「福祉ワーカーズ泉ヶ丘ホープ」が介護職や介護経験者を配したカフェを毎週1回開き、介護者が集っている。

「レスパイト、お節介士、カフェなど様々な場があれば介護者も使いやすい」と同市介護保険課の三井節子課長補佐。いずれも始まったばかりだが、着実な一歩である。（宮内禎一）